国際芥川龍之介学会 ISAS　第 3 回研究集会　印象記

宮﨑　由子（熊本県立大学・大学院生）

第 3 回研究集会は、2021 年 12 月 19 日（日）の 13:00～17:00 まで、ZOOM を使用したオンライン形式で行われた。当日は 50 名以上が参加し、研究発表一本に加え、運営委員会企画としてそれぞれ「①展覧会紹介」、「②研究を聞く」というテーマに沿った二つの報告が行われた。会は前半を庄司達也氏、後半を小澤純氏が担当した司会によって円滑に進行した。研究集会という会の性質上、質疑応答の時間が長めに確保されており、今回も参加者によって活発な議論が交わされ、有意義な集いとなった。

初めに、王青氏（大阪市立大学大学院生）の「芥川龍之介『VITA SEXUALIS』と回想される幼年時代」と題した研究発表が行われた。「VITA SEXUALIS」は、「自分」の幼少期から思春期に及ぶ、性に纏わる記憶を回想した芥川の初期習作である。未発表の草稿であるため単なる「性の記録」「断片的ノート」と位置づけられ、これまで早澤正人氏による考察などはあったが、主題面で取り上げられることはなかった。王氏は本作の執筆動機を、瞬間の快楽を描くことで自身の生を意味付けようとする内的衝動から生まれたと考察した。さらに「VITA SEXUALIS」を足掛かりとして、芥川の回想形式の作品群に意味付けを行った。「VITA SEXUALIS」の主題を「知の獲得」と定義し、「VITA SEXUALIS」と同じ時期を描いた芥川の自画像的作品群、いわゆる保吉ものの一編「少年」には「知の獲得」とそれに伴う「幸福の喪失」、さらに晩年の小説「玄鶴山房」には人生経験を重ねて「暗澹たる」人生に倦んだ人間の「無垢（無知）への退行願望」の表れを読み取った。同時代言説を詳細に踏まえたうえで、初期習作から晩年の作品にいたるまでを視野に入れ、芥川の回想形式の作品全体を意味付けようとする、興味深い論であった。

一方、初期と晩年に焦点があたり、取り上げられた作品が絞られていたため、参加者からはその断絶を埋める用例の提示を求められた。また本作は未発表作品であるがゆえに、編者による恣意的な操作が行われた可能性を踏まえた上での、慎重なアプローチが必要だとの指摘、さらに性のタブー視が薄い前近代的な子供観の中で育った芥川には「無垢な子供時代」は不在であったとの考察に対して、当時の性言説の普遍的な在り方を踏まえたとしても、個の内面にまで「無垢な幼年時代」が不在であったと断定するためには論拠が足りないのではないかとの指摘もあった。題名からも想起されるように、本作は森鷗外『キタ・セクスアリス』を模倣して書いた作品であり、芥川の鷗外受容を紐解く端緒にもなりえる。さらに、性的な抑圧から起こる煩悶と、文体の類似点から志賀直哉の影響も指摘された。本作の特徴ともいえる、過激な表現についてはもちろん議論の中で大きな位置を占めていた。特に興味深く思えたのは、作中に登場する月岡芳年の描いた『郵便報知新聞』の一枚絵の話題である。実物と比較するとその作中描写が正確であることから芥川が執筆の際に再度、該当の絵を見直した可能性が高い。参加者からは、同じ月岡芳年の絵が登場する「開化の良人」におい

ては本作のような直接的な性的描写は無く、雑誌掲載作品は抑制された表現になっているとの指摘があった。芥川が取材した内容について、どう作品に昇華したのかについても考察する手がかりとなるだろう。

次に「運営委員会企画① 展覧会紹介　芥川龍之介旧居跡地に刻まれた記憶」と題して、『芥川龍之介　家族の言葉』の編者である木口直子氏（田端文士村記念館 研究員）の報告が行われた。平成30年に東京都北区が取得した100坪の芥川龍之介旧居跡地の一部に芥川龍之介単独顕彰館「（仮称）芥川龍之介記念館」を創設するため、古代遺跡である田端不動坂遺跡の発掘が行われている。その途上で発見された二つの防空壕跡地の出土品についての報告であった。「田端の家」は大正3年に一家で転居してから後、少時離れることはあっても晩年まで暮らした芥川にとってなじみ深い場所である。芥川没後、邸宅自体は東京大空襲で焼失したものの、跡地から発見された防空壕からは100点以上もの日用品が出土した。木口氏から食器や瓶、瓦など、様々な出土品について考察も含めて詳細に紹介された。出土品の特定方法は緻密且つ念入りなものだった。例えば、芥川の実父新原敏三が経営に関わった「耕牧舎」の牛乳瓶については記載された電話番号をもとにして、また「丸善」のインキ瓶の素材が常滑焼であることから、それぞれのおおまかな製造年代が特定された。また、芥川の主治医である下島勲が開業した「楽天堂医院」の薬瓶や、隣家の鋳金工芸作家である香取秀真の工房のものと見られる坩堝も出土し、当時の芥川を取り巻く状況に想いを馳せることができた。

木口氏の「文化と生活を知ることが、文学が生まれたきっかけを知ることにもつながる」との言葉が印象に残った。文学研究の中では普段意識されにくい、日用品についての考察は想像力を刺激された。また参加者から出た「調査を重ねた上でもなお芥川のものとは断定はできないと躊躇する姿勢は文学研究においても大きな学びだ」という意見に深く首肯した。徹底した実証的な研究姿勢を見習いたい。また発表途中に詳細が不明だとされた「マロニー」という薬について、参加者から昭和4年の朝日新聞の広告が紹介された。最後に、木口氏から芥川に関わる新資料及び田端文士村記念館の展示紹介も行われた。

プログラムの最後は、「運営委員会企画② 研究を聞く　作品が開く読み―『トロッコ』に即して」と題して髙橋博史氏（元白百合女子大学教員）の報告が行われた。『芥川文学の達成と模索―「芋粥」から「六の宮の姫君」まで』の著者である髙橋氏による、「作品をよく読む」という文学研究の基礎に立ち返る意義深い報告だった。すぐれた文学作品に触れた時に胸をうつ「何か」とは、未知の領域に触れたことによる自己の変化であり、作品を読む我々はその未知をなおざりにし、先入観によって作品を読んでいるのではないかとの問題提起が行われた。芥川の「トロッコ」についてしばしば問題にされる終局部、「雑誌社で校正の仕事に従事する」主人公「良平」の姿は、どこか「しみじみとした感慨」を読者に抱かせるが、これまでは前半部と断絶がある、また記載した意図が不明だとされてきた。しかしこの部分が「きちんと読めない」ということは「わかったつもり」になっているのではないかと髙橋氏は指摘する。その上で、回想である「良平」の子供時代の出来事について、あらため

て丁寧な分析が行われた。

殊に、土工に激しく叱責された「良平」が「工事場のトロツコを見ても、二度と乗つて見ようと思つた事はない」と考える場面から一転、十日ほどして「本線になる線路を登ってきたトロッコ」を見て近づいていった点に着目する。こうした一見矛盾ともとれる場面に対して、矛盾しない読み解きが順を追って行われる過程には目を開かされるばかりだった。髙橋氏は「工事場を往復するだけのトロッコ」と「本線を行くトロッコ」とを比較し、前者との関わりを「遊び」で後者を「仕事」と分類する。子供時代の回想を通して、後者の「トロッコ」と終局部の「良平」の「仕事」を同一のものと捉え、「良平」の「仕事」と「遊び」の峻別こそ、読後のしみじみとした寂しさへとつながるのだと考察する。そして、小林多喜二の「蟹工船」、志賀直哉の「焚火」を挙げ、「仕事」と「遊び」を二項対立的に捉えるのではなく、「仕事」の中に「遊び」を回復する道を模索するという主題を提示した。

報告後、参加者からは多くの反応があり、活発な議論が行われた。「良平」の勤める出版社を大観社だと考える根拠、「仕事」中に子供時代を回想する「今」の「良平」に「遊び」はあるのか、また「蟹工船」「焚火」も含めた作中における「遊び」の性質についてなど、報告に続いて、正確に本文を読み取る作業が参加者の間でも続けられた。運筆を「売文生活」と揶揄した芥川の執筆姿勢と併せて考えることも有効だろう。さらに「トロッコ」の素材提供者である力石平三が関わった「百合」「一塊の土」も含めた考察も行われた。髙橋氏の「丁寧に読むことは往復、螺旋運動」という言葉に感銘を受けた。勤務先の中学・高等学校の授業においても、生徒と共に作品を丁寧に読む姿勢を大切にしたい。

最後に会長の髙橋龍夫氏（専修大学教授）による、今回の研究発表と報告に対する総括と閉会の言葉によって会は締めくくられた。今後の研究、教育活動を行う上で、大変刺激になる研究集会であった。運営に携わられた諸先生方に深く感謝したい。